



Title	故永田仁助氏を憶ふ
Author(s)	吉田, 傳治郎
Citation	懷徳. 1927, 6, p. 43-45
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88744">https://hdl.handle.net/11094/88744</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

來ない時分でありましたからお目にかゝれず、どうとう一進一退の御病狀を人づてに聞く内に逝かれました。誠に遺憾の至りであります。私は自分の學識の未熟な儘に先生の宋學の蘊蓄をも伺ふ由がなく、只寛厚なる先生の前で一向雜談に打興するのみに過ぎしたのを顧みて忸怩たらざるを得ないのです。

どうしてかう私は後悔ばかりしてゐるのです。もう後悔はしたくないと思つて居ります。

## 故永田仁助氏を憶ふ

日本橋尋常小學校長 吉田傳治郎

私が故永田仁助氏を知る様になつたのは明治三十九年八月當校へ赴任してから後のことである、學校沿革誌に載れる名譽職について職員から一々説明を聞いた其一人が即ち永田氏である。

氏は二十三歳で當校の學務委員長を勤められ當校今日の有隣會も氏の當時に創められたもので殊に有隣會なる名稱は論語の德孤ならず必ず隣ありから氏の撰ばれたものであると聞いた。其處で其名稱の會心と若年なるも既に公共事業に老年を凌ぐ活動をせられた事については其凡ならざるを惟ひ是

非一度其聲歎に接したく思つた、其後旬日ならずして當時の浪速銀行へ頭取永田翁を訪ねた、刺を通じて應接室に待つこと數分間の後入り來られた和服姿の堂々たる風貌、顔に寛爾微笑を浮べて「私が永田ですお待せしました」と冒頭して百年知己の如く語り出されたのは、今學校の兒童は何程ありましか先生の數は：私共の學校を世話して居つた時分とは餘程多くなりましたね、とさも懷古の情に打たれて今を喜ばれる容子が有り／＼と見えた。これが初對面の極大略である。其後途上などで逢つても何日も變らぬ瀟灑な態度で時には先方からヤアと聲をかけられて恐縮することもあつた、そして二言目には學校のことを聞かれるのが常であつた。大正九年三月から太田勘兵衛氏を通じて年々當校を卒業する兒童に義務教育修了の祝として男兒には算盤女兒には算臺を贈らるゝことになつた、此等のことから察しても如何に部内後進生向上に心を留めて居られたかが窺はれる。

氏は生粹の浪速兒である、浪速兒で名を成せる者古來學者の他には稀である、宜なる哉氏は幼少から藤澤南岳先生に教を受けられたそうで、生を終らるゝまで懷德堂の興隆に意を注がれて居た人で結局漢學で鍛へ上げた實業家であつたのである。性温厚篤實とは斯る人をこそいふのであらう。如何なる人に接するも驕ふることもなく温和に貴賤貧富の別なく皆一様に心地よく親しく遇せられたのは世間周知の事實である而も氏は頭腦明晰、思慮遠大、經濟界の重鎮で身は勅選議員であつた恂に得難い偉大なる人格者であつたのである。然るに昭和二年三月十日突然黃泉の客となられた。

この一大人格者を失つたことは我校並に社會教化上の大損耗なるのみならず實に我國實業界の一大損失である噫々。

## 故永田理事長と松山教授を憶ふ

武 内 義 雄

今年懷德堂が永田理事長と松山教授とを失つたことは堂の爲め誠に痛惜すべきことである。永田翁が懷德堂記念會の理事長として盡力されたことや、松山教授が開堂以來の學事に骨を折られたことについては、別に述べられる方があらうから私は唯私の受た印象をのべて追慕の誠を表したい。

或る日私が故西村先生を松ヶ枝町の御宅に訪ねると、先生は『今日は朝から永田君が來られて懷德堂の事に就いて相談して歸られたが、懷德堂もごうにか眼鼻がついて來た。自分は懷德堂を再興して大阪人に聖人の教を傳へることを一生の仕事とするつもりであるが、この事業を與にすることの能る人は永田君より外にはない。其大阪實業界に於ける聲望といひ、其漢學に對する理解といひ、其老熟した人格といひ、ともに此事業を大成するに足る人だ』と激賞されて、其抱負を語られた。當時私は